

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

中信安全登山研究会 冬の検討会

12月1日、池田工業高校において中信安全登山研究会の冬の会議が行なわれた。冒頭安全登山研究会会長の挨拶に続いて、大北3校の夏山学校登山の反省、各校山岳部のこれまでの活動報告、冬に向けての計画検討、その他検討事項が2時間あまりにわたって話し合われた。出席者は春原（池工校長：会長）、西牧（大町北：事務局）、小沼（大町）、塩川（木曾青峰）、藤田（池工）、大西の6名。夏山関係では、大町山岳部の5泊6日の夏山合宿（裏銀座縦走+穂高）が出色だった。長く山に入っていることで、前半雨にたたられたがそれ故に生徒が強くなったこと、クライミング目的で当初はあまり山が好きでなかった生徒がこの縦走で山の良さを体感し山が好きになったという感想をもったという報告があった。

冬に向けての検討では、大町、大町北、池工、県ヶ丘に冬山を積極的にやってみたいという前向きな生徒がいることが報告された。冬山については経験のある顧問が減ってきている中、中信地区にはどの学校にも冬山を指導できる顧問が一人はいる。しかし、やはり雪上となれば、経験者が一人では不安であり、この会ではこれまでも、学校の枠を越えて複数の学校での合同合宿などを提案してきた。改めてそういう生徒向けに学校の枠を越えた顧問の連携で育てて行こうという提言があった。その手始めに池工と県ヶ丘は来週12月17、18に耐寒訓練と冬山準備合宿をしたいと思う。さらに年が明けた1月28、29日には大町と池工で雪上訓練をしようということで計画を進めている。中信地区の高校はもちろんそれ以外の学校でも参加希望があればどうぞ。

ヤスィックアグルの蒼い空 24

ホータン観光 その1

8月15日、天気はあまりよくない。僕らが山を下りてからずっとこんな調子である。その意味では本当にいい時期に登山行動をすることができた。

昨日の食べ過ぎで僕自身も腹が重いが、下山以来胃がどんどんものを受け付けてくれるし、ウイグル料理はどれも美味しいので、いくらでもパクパク。挙げ句の果ては、車の中などでも、みんなで分配した残り物の行動食を暇な時には口にしている。そんなことも影響してだろうか、今日、僕以外の二人のロートル隊員が倒れた。胃腸の調子がよくない上に発熱もしている。朝飯に松田、久根の両氏が出てこない。久根さんは3回目のホータンでもあるのでホテルで休養。しかし、初めての松田さんは、観光には同行するという。しかし、終日ヨボヨボ、トイレに直行の体での観光は見ていて気の毒だった。早朝、佐藤君と二人で町を歩く。ホテルの南側の大路を横切ってその先の小路に入ると、ウイグル族の伝統的な住居の建ち並ぶ閑静な住宅街だった。こういった町並みがどんどん破壊され、マンションが林立しているのが今のホータンの様子。10年前には全人口の90%以上がウイグル族、中国語は通じな



コックマルム遺跡の祭壇

いとまで言われていたホータンであるが、今ではこういった古い町並みの方が珍しく、町中には中国語の看板がウイグル語の看板を凌駕している有様である。経済特区の名のもとにどんどん漢族が入植し増殖している。

10:00 久根さんをホテルに残して観光に出かける。今日はコックマルム遺跡、ラワック遺跡など日本ではまだほとんど紹介されていない場所を中心にマニアックな場所を案内してもらうことにする。この2カ所、去年ヌルさんに連れて行ってもらったが、大学時代をホータンで過ごしたウイグル族のグリさん（出身地はトルファン）ですら行ったことはないという場所。高い丘の上にあるコックマルムはホータン地区のイスラム教の聖地であり、遠く崑崙の山を望み眼下にカラカシ河を望む風光明媚な地である。その昔、新疆地区をイスラム化した聖人コックマルムが、ホータンをイスラム化した後、亡くなって埋葬された場所だそうで、ホータンの人にとっては大事な場所。ここを訪れずしては、メッカにも行かれないほどの場所だという。訪れた人々が生け贄にと捧げた羊の毛皮がいくつも供えられて、そのまま飾られている珍しい場所である。

コックマルムからの帰途、いくつかのオアシスを通った。オアシスの街路樹は通常ポプラだ。このポプラ並木の続く道は西域の情緒をいやが上にも盛り上げる。郊外の村では果樹栽培も盛んで、時にはこのポプラ並木の代わりに左右に葡萄が植えられて、道路上に葡萄棚を作ってアーケードのように覆っている箇所もある。その葡萄棚の下にはクリークが通じ、ロバ車が走っている。しかし、10年前に比べればロバ車の数はめっきり減った。

そんな西域の風情と変化を感じつつ、次に訪れたのは絨毯工場。ホータンの絨毯はシルクのもので出色である。目の前で織り子さんが、縦糸に模様を手際よく編み込んでいく様にはいつも感心させられる。一応織り子さんの前には完成図が置かれているが、恐らく彼女たちはすでにその模様を頭と手が覚えているのだろう、白い縦糸に幾何学模様が織り込むそのスピードは並大抵ではない。しかしそのスピードをもってしても目の前の絨毯ができていくのには大きいものになると半年以上もかかるというのだ。

昼食でいったんホテルに戻った後、ラワック遺跡へと向かった。去年は整備中で未公開だったのを無理矢理アイレットさんがねじ込んでくれて見学をしたのだが、今年は文物保護局の管理も整ったということで、入場券はあらかじめホータン博物館で買っていく。ラワックは数年前に開通したホータンとクチャをつなぐ新砂漠公路沿いにあり、その道が開通したからこそ一般人にも見学が可能になった場所である。ホータン市街からおおよそ1時間、新砂漠公路を40kmほど進んだ砂漠の真ん中にそれはある。見学科は一人250元（日本円3250円）、加えて20元（同260円）の撮影料とは、庶民の金銭感覚からすればばらばらな価格設定である。去年は整備中だったと書いたが、それと変わった点は、周りを塀で囲み、遺跡（泥壁造りの古い仏教寺院の痕跡）に近づけないように木道を張り巡らせたことだけ。文化財保護の観点は大いに評価できるが、これだけの金を取るのなら解説等をもう少し充実させてもらいたいものと思った。

夕食は外で食べませんかとヌルさんにリクエストして、町中の食堂に出た。ウイグルの名物料理の一つ、大盤鶏のフルコース。大盤鶏は鶏を1羽丸ごと使ってジャガイモなどの野菜と煮込んだ一品。明日故郷のトルファンへ帰るというグリさんのお別れ会も兼ねて設営したが、松田、久根の両人が腹具合が良くないと遠慮したため、残ったメンバーが食べた量は半端ではなかった。